

5月の学習会の案内

平成27年5月8日

気が付けば、ゴールデンウィークも終了し、本格的に日々の学校生活がスタートする時期になりました。4月のスタートでがんばってきた子どもたちも少し疲れが出たり気が緩んだりする時期です。附属小学校の4年生は、もうすぐ山の学校です。ここでもう一度みんなで目指す姿を確認しながら仲間との関係がさらに深まっていくような活動を行っていきたいところです。

さて、語る会の方では来年に行われる日本国語教育学会西日本集会へ向けての準備を考えていく段階に入ってきました。大きな学会ですが、先生方と共に目指す姿を確認しながら来年へ向けての活動を少しずつ進めていければと思っています。お忙しいところかとは思いますが、ぜひ多くの先生方に参加いただけるとありがたいです。よろしくお願ひします。

新たに参加を希望される先生へ

本学習会では、いつでも参加をお待ちしています。「初めてなのですが」と言って会場にきてくだされば、喜んで案内させていただきます。どうぞ気軽にお越しください。お待ちしております。

日 時	平成27年5月16日(土) 9:30~12:00
場 所	岡山大学教師教育開発センター 東山ランチ 2F 授業研究室 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
連絡先	小出 真規(こいで まさき) TEL 090-5704-7339 m-koide@okayama-u.ac.jp(学校パソコン) m.koide.freewill@icloud.com(携帯メール) ※小出の携帯メールアドレスが変更になっています。
内 容	西日本集会へ向けての相談 教材研究(内容未定)

<お知らせ>

※ 駐車場について

東山ランチの駐車場をお使ください。

※ 会費納入

まだの方は新年度の年会費をお願いします。2000円です。

4月の学習会の報告

文責 小出

4月の語る会は、「時計の時間と心の時間」（6年生教材）の教材研究を行いました。

○田中先生

かつて恩師の野馳先生から料理と国語は似ているという話があった。メニュー、包丁のトントンという音。同じですね。といわれた。最近は家族の居住の変化もあって計画を立てて、買い物にもいっている。いろんな生活の基本のレベルで抽象のレベルをあげていくと同じところが見えてくる。充実させようとする、様々な観点から考えていかないといけない、分析の観点に加え、感性の観点も組み込みながら、合わせていったところでもいい仕事ができればと思っている。それを国語教育でも活かしていければいいですね。

○小川先生

IPU 2年目。授業が4つ増えた。昨年に加えて4つ増えた。勝手にわかると少し楽になってくる。学生は、教材研究というのは、教材を読み込むということを思っていない。すぐ飛んで指導案、発問を考えるといったことになっていく。難波先生の授業をDVDで見る授業を行った。どうやってこの授業をしているのか、10秒が命を守る、教材が読めない。文章構成ということばも始めて。構成が読めないと、筆者の主張も読めない。

先月の「笑うから楽しい」については、文章量の制限がある。コンパクトにまとめながら、読み手を納得させる、説得させる方法があるのでは。そういうことを考えるという観点もある。

本日の教材研究について 「時計の時間と心の時間」以下の観点で

- ① 3時間くらいでこれを扱う
- ② 筆者の意図をとらえる。先ほどの文章構成、論理の展開、1段落がどう2段落へ、考えの段落と事実の段落、まとめの段落はどうなっているか。おもしろみつけであまりしていない教材研究を試みてはどうか。丸ごと読みをするとこの授業はどうなるのかという点で教材研究をする。
- ③ 西日本集会でという視点をもって。学びのつながり 発達のつながり 学習者同士のつながり。学びのつながりという面から見ると、この「時計の時間と心の時間」を学習したあとどのような3次が考えられるか、単元構想という面でも考えていければと思っている。筆者の意図をとらえた上で、もちろんキーワードも解釈しないといけないが、段落同士の関係や段落の役割はどのようなか、まとめはどこか、といった文章構成に関する教材研究をていねいにできたらいいのではないか。筆者の考えが述べられている文はどこか、それはどことつながっているのか。その後で、授業化を考えていく。たとえば、時計の時間と心の時間のちがいを、付き合い方をたしかめよう、あるいは、さぐろうといった直感がもてそう。

○田中先生

おもしろみつけ単独で学びは終わらない、むしろ丸ごと読みの方で終わる。丸ごと読みをずっとやっているとそれでは育ちにくいところがあってそこを補完するのが、おもしろみつけ。どちらかだけというより両方を合わせて進めていく方がいい。

○グループ発表

<八代先生グループ>

説明文の読み方として、それぞれの段落の小見出しを付けて考えてみた。また、分析的に考えて、段落分析も行った。批判的に読むと例示に注目できる。段落同士の関係から説得力についても検討を行った。

共感的に読むということでは、筆者は何を伝えようとしているかについて読むことができる。次に批判的に読むと、納得できるかという読み方で読んでいくことになる。

段落ごとの小見出しについては、以下の通り

- ① 2つの時間があってそれぞれちがうという話題提示
- ② 心の時間の定義づけ 特性について 進み方③～⑤ 感覚がちがっている⑥につながっている
- ③ 大きなくくりで一つのまとまり 心の感じ方によって
- ④ 体の状態でちがうという例示
- ⑤ 刺激によってかわるといふ例示
- ⑥ 人によって感覚がちがうという特性
- ⑦ ③～⑥の対応を示す一文
- ⑧ 筆者の意見 ちえというキーワード 社会というキーワード

さらに分析的に読むと

①と②が対応している。⑦はゆさぶり⑧がまとめて尾括型の説明文。⑦⑧両方大事。⑧の最後の一文が最後によく読んでみれば、③、④がどう機能しているのかということにいけるのではないかな。

今まで意識していなかった心の時間を読み手の意識がなかった情報を最初に示すことで、引き込まれるのではないかな。無意識を意識していくという意外性という説得力があるのではないかな。

③～⑥の例示について、本当にそうなのかたしかめようという直感をたしかめる段階で読んでいけるといい。⑧のキーワードと小見出しをつなげて発言してくるような子どもや、⑦と⑧の両方が大事だという発言があるのではないかな。時計の時間は社会を成り立たせるために大事だが、心の時間ということを加味していくことで、よりよい生活を営むことができるようにしていくことが大切なのではないかということが読めるのではないかな。

<田岡先生グループ>

教材分析

④、⑤については子どもが実感できないのではないかな。かぎ括弧のところにどういう意味があるのか。②の扱い、⑦の扱いはどうか。かぎ括弧については、筆者が特定して意味づけしている言葉としてとらえた。内容が抽象的な言葉が多く、子どもがぱっと理解できにくいのではないかな

授業化

① 通読していろいろな直感を出させる。じゃあ、筆者は何を伝えようとしているのか。双括型にも見えるが、そうでもない。最後どのように次のめあてをもたせるか。「市川さんが考える時間と付き合う知恵をみつけていこう」といったことになるか。

② 中身を読んでいく

③ 市川さんの説明の工夫をみつけよう

「笑うから・・・」と結びつけて、よりよい生活について考えようとなると、6年生の発達にふさわしい。AからBという考え方ができる。時計の時間ありきだが、心の時間もある。BからAという考え方もできるとするのが6年生にふさわしいのではないかな。

<小野先生グループ>

3時間を計画

題名をまず読むことが大切。時計の時間と心の時間の関係が書いてあるんだなという直感となるかはわからないが、学習の構えをもたせるのがいいのではないか。関係のあり方を探ろうとすると、それが子どもが読みたいというめあてになるのかということが疑問。子どもみんなが読みたいとなるめあては何かと考えた。双括型をみた上でのこの学習材。それを見ていくということが1時でできるはず。⑧の4行目「人それぞれに・・・」に反応してきた子を取り上げることが、もっともストレートに響くのではないか。

2時目「人それぞれに感覚がちがうというのは本当か」丸ごと読みなんだけど、メインは例示の4つになってくる。どの段落も筆者の考えが「のです」で位置づけられている。これをキーワードにしながら、4つの段落を読んで、それぞれの段落で、自分だったらどうという自分の考えをもって発表するとしやすいのではないか。

終末の残りで、心の時間の大切さは見えてきたけど、時計の時間の大切さはどうという発問、それぞれの段落のつながり確かめたりすることで、心と時計のつながりが見えてくるのではないか。そして、3時目は⑦と⑧をメインにすえて、時間と付き合う知恵と2時目がどんなつながりがあるのかなという授業展開ができれば3時間でできるのではないか。

○小川先生

丸ごと読みをしませんかという提案を最初にした。今まで、一つの言葉からどう思うかという教材研究はしてきた。文章構成に関する教材研究はあまりしてこなかった。

授業の流れを考えると、時計と心の時間について確かめようという直感がでる。直感は経験をつめばシャープになっていく。直観をたしかめていくときに、小見出しをつける、段落のつながりをつけることになっていく。単独で行うのではなく、読みを成立させるためにそれを行っていく。

教材研究。まずは、一人の読み手として読みを作る。教師である以上は、ちがう読みも、子どもたちが読みを作ってくるであろう道筋をきちっともおかないと授業にならない。きっと子どもは筆者の伝えたいことをこう読んでくるよ、ということをもっておかないといけない。3、4年レベルだと自分の生活をもとに文章を読む。5、6年生になってくると、生活に照らして読むということとは違った読みが必要。3時間を設定したのは、どこのどんなところに焦点をあてるかということを考えてほしかった。

子どもの読み、「わたしは、市川さんはこのことを伝えようとしています。わけは・・・」のわけのところが大切。そして、つけたしがあります。「7段落に『いかに不可欠』と書いています。だから、両方大事です。」というようにそれぞれに読み、着目の違いがある。それを情報交換しながら、書き手の伝えたいことを読むためには、どこに着目するかがわかるようにしていく授業が求められる。

最初の図には、全部時計が出ている、図や表に感心をもちながら、読む子もいる。対比的に述べるという書きぶりをしていないのは筆者の思いがあるのではないか。

3次としては、「時計の時間と心の時間」と「笑うから楽しい」と自分とのつながりを考えて表現するという活動が考えられる。

○田中先生

文章構成図の図式化

大学は教材研究のときに、教材研究として、文章構造図をまず作ってみようとする。なぜ、そう考えるか根拠になる表現があるはず。そういう意味で意味がある。ということで大学ではやる。

①話題提示 ⑧で確認の発言 双括型 「たりたり」で2つの観点が示される

「さらに」は2つめになっているが 「さらに」には着目しないといけない、「たりたり」にも着目「よってもよっても」にも着目。そうした根拠をもとにこの構造図。

①⑧の双括で言っていること以上のことを言っている、筆者はどのようなことを伝えたいのかという直観がまずは出てくる、もう一つはそれをどのように表しているのかという直観も出てくる。小学校では難しいが徐々にもてるようになって欲しい。もう一つは、それをどう評価しますか、ということ。文章をもとにわかったとなるのは、書かれていることをもとにして、書かれていないことまで考える、認識の変革がおこった時点ということになる。その時に深くわかったという感じをもつ。なぜこういうことを言わないといけなかったのか。時計の時間の必然性。うまくいかないという状況を認知しているから心の時間も大切ということになっている。そういうところも見出してほしいので、2時間+2時間+1時間（くらべる）

発達と学習やつながりについて

学習者が発達を考えるは必要なし、指導者が考える、それまでの獲得している能力にどのようなものをプラスしていくか。ということを考える。二つの作品の共通点を考えるという活動が想定できる。6年生としては、筆者の視点から書かれている過程をみていくということが必要な段階に入ってくる。なぜ筆者は時計と心が大切なのか、（書かれていない部分について考える）ということまでいける発達のステップとして位置づけられる。比べるということは、2つの観点がある。一つは、伝えようとする内容であり価値的側面。もう一方は、述べ方、どのように述べているかということ。

「時計の時間と心の時間」と「笑うから楽しい」については、そうとう考えて2つをならべたと思われる。客観的と主観的を取り上げてあった「時計と心」、「笑うから楽しい」との共通性は、筆者がどちらも心理学者という点、現代社会の問題になっているうまくいかないケースがあるということ。解明していくことによって明るい社会を作っていこうとする共通性を見出していけるのではないか。文章の構造としては、冒頭が繰り返し、出てきている。真ん中で科学的根拠をしめす。双括型であり、そのことに対してあなたはどう思いますかという話合いが成立するのではないか。3時間目は、学びのつながりとして読むことと話し合うことということ指導計画の中に組み込んでいけるのではないか。

西日本集会について

3つのつながり それを意識して勉強会を進めていく

発達のつながり（幼稚園～高校）

学習者のつながり（子どもたちがどうつながるかといった学びあい）

学びのつながり（読むことから読むこと、読むことから書くこと、または、一つの単元から別の教科へといったつながり 内容つながりではなく、領域またぎの感覚で読むの中で話す、聞くを取り入れて使っていくということが一般的、書くことから読むということにもうつながっている。単元学習を根付かせようということが根源にある。読むを読むで終わらせるのではなく、つながりは活動のところをメインでももちろん内容も考えるが、言語活動のつながりをウエイトが高い。）

今後は、3つのグループにわかれて考えていってはどうか。